

カナダ人が小野ゼミ生になってみて

第9期（特別聴講生） 清水 鈴

私は日本生まれの日本人でありながら、生後3ヶ月でカナダに移って以来20年間、日系カナディアンとしてトロントで生活してきました。しかし、日本のテレビ、インターネット、両親の話など、間接的に日本の素晴らしい文化・技術を知った私は、次第に日本という国に強い関心を抱くようになりました。また、日本に行けば、祖父母に良くしてもらえ、食べたい物を食べただけ食べ、遊びたい所にいつでも行ける…そんな天国のような日本に「住んでみたい」と思うことは、海外に住む日系人の子供が自然と感じることであったのかも知れません。しかし、私は高校生の頃から、この「住みたい」という感情がもっと単純に、「お客様扱い」を受けてきた過去の日本滞在経験から来ていることに薄々気づき始めました。一方で、本当の日本の姿に触れてみたいと思ったのも、その頃からです。学生のうちに日本に留学し、日本の学校や社会の仕組みを見て、日本の真の姿に迫りたいと思ったのです。

そこで、まずは私の本業(?)である「デザイン」を学びながら日本へ留学できる、カナダの大学に入学しました。その大学の提携校の1つが慶應でした。ただ、慶應に通い始めてすぐに、私の留学生活は、自分が求めているものとは少し違うことがわかりました。単に留学し、講義を受けるだけでは、学生や先生方との交わりが本当に限られていたということです。そのことを小野先生も重々承知していて、私は「小野ゼミ」に出会い、仲間に入れてもらうことができました。



9期女性陣と大学院生の菊盛さんと共に（著者は前列右端）

帰国して、留学から帰ってきた他のどの仲間に話しても、私のような経験をした人はいませんでした。小野ゼミには、「仲間」、「勉強」、「姿勢」というキーワードをもとに沢山の出会いと驚きがありました。毎日が新しい発見で、私は皆から学ぶことばかりでした。そして、私はその新しい刺激的な環境に、毎日興奮し、楽しんでいたのでした。

カナダでは小学校の教育から個性を伸ばせる半面、団体意識が低く、個人主義を徹底している所が多々あります。私はそのような中で育ち、皆で何かを成し遂げるといった経験があまりありませんでした。小野ゼミは、私が今まで経験した環境とは全く違い、明確なヒエラルキーが存在していました。しっかりと手順を踏みながら物事を進めていく大切さや、自己主張するだけでは物事が進まないこともよくわかりました。小野先生の「ゼミ生の為なら」という姿勢にも本当に驚きました。そこまでゼミ生の為に時間を割いてくださる先生に、カナダでは出会ったことがないからです。先輩と後輩という上下関係も新鮮で、日本の社会の仕組みの一部を理解したように思いました。

ただ、小野ゼミの活動で心残りなことが2つあります。1つは、ゼミ生として2年間を皆と過ごせなかったということです。これは、留学生なので当然といえば当然なのですが…。留学生の無い物ねだりなのかもしれません。もう1つは、インターナショナルリレーションを伝えるべき役割を果たせなかったことです。日本の文化や情報を吸収するのに精一杯で、皆の刺激になるような情報を提供したり、カナダのことを伝えたりすることができなかったと思います。そこは、やはり私がカナダのことについて勉強不足だったからなのだと気付きました。

私は、刺激を与え、与えられる小野ゼミの環境が大好きでした。皆には、私の留学生生活を有意義なものにして頂いたことに対し、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。近い将来この国を発掘するために再び訪れます。カナダに帰国後、この留学を振り返った今、結局は「旅行者気分」だったのだ、とも思っています。今度来る時は本当の「住人」として再度挑戦したいと思います。



著者の帰国前、空港にて（著者は中央）